市史通信

【目次】
●一九四六年の大口地区
—「天皇巡幸」説明資料から—
●女子野球と横浜
●横浜現代史人物伝②
写真家・前川謙三
●アンケート集計結果より
●開架資料紹介
「横浜の空襲と戦災パネル一覧」
●市史資料室たより

歳末大売り出しの大口通商店街　1962（昭和37年）12月
広報課写真資料（横浜市史資料室所蔵）

第16号
【発行日】2013年3月31日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisiriyou@city.yokohama.jp
【ホームページ】
http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/housei/sisi/

一九四六年の大口地区
—「天皇巡幸」説明資料から—

一九四六（昭和二一）年二月、昭和天皇は、全国巡幸の最初として神奈川県を訪問した。県や関係各市には二月初旬に計画が伝えられ、慌ただしく準備が進められたようである。当時、横浜市長であった半井清の手元でも、説明するためのさまざまな資料が作られている。

現在、市史資料室が所蔵している「半井清資料」には、「行幸一件」（A—26）の封筒に入れられた一八点の資料が残されている。この中には、説明のためのメモ書きや、「戦災者」等の収容施設、中央卸売市場へ入る物資、伝染病の発生状況のメモと共に、訪問先の一つである神奈川区大口地区の概況が含まれており、図も添えてあるために当時の様子がよく分かる資料である。

この天皇巡幸は画期であり、既にこれらの資料も使って『横浜市史Ⅱ』第二巻に詳しく述べられている。また、大口の商店街については、この時期の特徴的な商店街として、同じく第二巻に詳述されている。最近では、本宮一男氏の紹介もある。その他の事項も含め、『横浜市史Ⅱ』等に依りつつ、図を中心に大口地区の様子を紹介しよう。

「神奈川県行幸」の概要

「行幸」は、二月一九日に川崎市・横浜市、二〇日に横須賀市へ訪問する予定であった。川崎市・横浜市におけるスケジュールは、以下の通りであった（カッコ内は移動時間・所要時間、半井清資料A—26—17）。

出発九時（七〇分）、昭和電工一〇時一〇分～一〇時五〇分（四〇分）、日産重工業一一時一〇分～一一時四〇分（三〇分）、県庁一一時五五分～一三時二五分（九〇分）、伊勢佐木町通を通過（二〇分）、稲荷台共同宿舎一三時四五分～一四時〇〇分（一五分）、横浜市復興局一四時〇五分～一四時二〇分（一五分）、大口町商店街・大口町戦時住区一四時三五分～一四時四〇分（五分）、帰還一五時五〇分。

午前九時、皇居を自動車で出発し、まず、川崎市扇町の昭和電工へ向かい、予定より早く着き、社長・工場長や川崎市長の説明を聞いた。次に横浜市内に入り、神奈川区宝町の日産に到着、社長や工場長から説明を受け、トラックのラインオフなどを見学した。

次に県庁に向かい、昼食後、半井市長から横浜市の概況を聞き、屋上へ登って内山岩太郎県知事から県内の様子などを聴取した。その後、稲荷台共同宿舎（稲荷台小）へ向かったが、その間、伊勢佐木町商店街を七丁目まで通過し、道慶橋か一本橋を渡って初音町の交差点から藤棚方面へ向かっている。

稲荷台共同宿舎は、戦災で焼けた国民学校の敷地に、住宅緊急措置令に基づき住宅営団が航空技術廠の寮などを

移築し、戦災被害者の共同住宅としたもので、全市では五国民学校敷地へ約一七〇〇戸分であった。稲荷台には、移築が完成した一棟に二三世帯一〇三人が居住していた。昭和天皇は、住宅営団の支所長の説明を聞くとともに、中に入って居住者とも話をしている。

そこから、老松町の横浜市復興局（横浜市図書館）へ向かい、屋上で半井市長から説明を受けている。メモでは、戦災前・後の写真を用意し、進駐軍が建築した兵舎や飛行場、接収された野沢屋百貨店などの伊勢佐木町の様子、また、野毛の商店街の計画や露店、簡易住宅の進捗なども説明する予定となっていた。

説明資料によると（半井清資料A―26―8）、横浜市全体の住宅計画は、簡易住宅では建築承認三六二八戸に対し、完成六五八戸、工事中六六五戸であった。稲荷台のような移築は、横浜市一八棟、住宅営団二一棟、戦災者同盟一一棟の計五〇棟、居住世帯は九八一世帯であった。その他、仮小屋補修用の木材を、町内会を通じて配給するなどの事業も行っていた。

次に大口地区へ向かった。この「行幸」に当たって、半井市長は、戦災からの復興を目指している市民生活を知ってもらうには、「ヤミ市」を見てもらうのがいちばんだと提案したという。警備の問題から反対もあったが、大口通商店街の視察が実現した。大口では、図1の右側の商店街を自動車で徐行し、その後、大口仲町の復興住区では、車を降りて視察している。

これで全予定を終了し帰還した。

大口通商店街の様子

大口は、子安地先の埋立地などへの工場の進出とともに発展してきた。一九二七（昭和二）年には、「商業振興団体」として大口聯合会が組織されており、三一年頃には会員数六五であった（『横浜市商工案内』昭和八年版）。

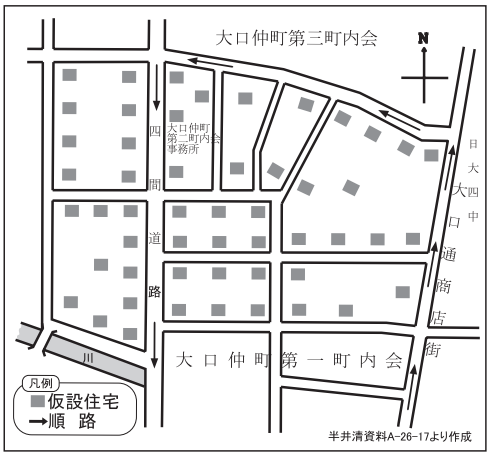
「行幸一件」にある商店街の概要を記した文書にも、同様の経過が記されている（「神奈川区　大口通商店街」横浜市、半井清資料A―26―4）。

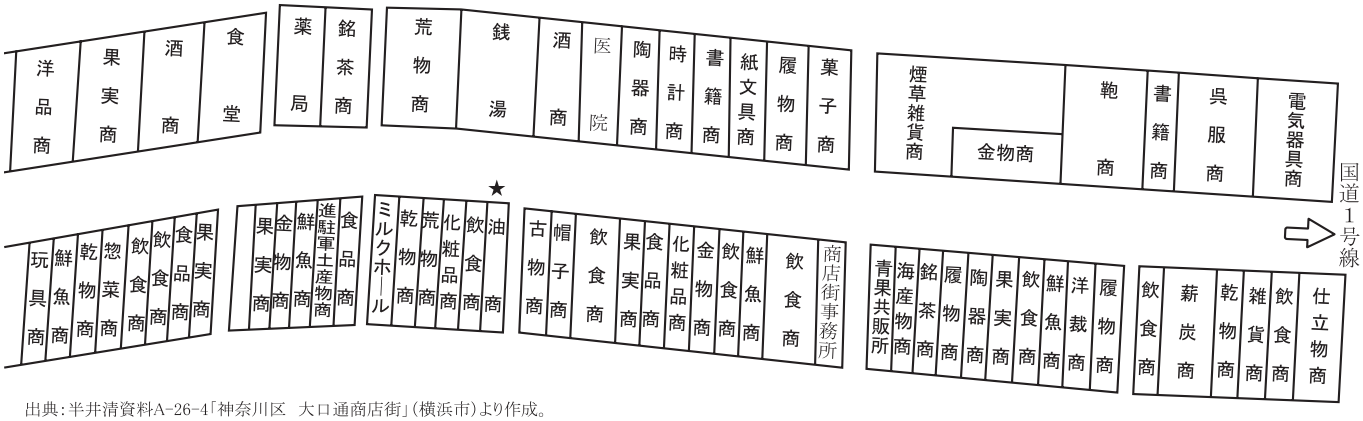
これによると、関東大震災後の子安地先埋立地の工場街の出現によって住宅が増加し、これに連れて商店も増加、大口銀座と称し、三四（昭和九）年頃より殷賑を極めたという。しかし、太平洋戦争末期、四五年三月に建物疎開により西側全部が撤去の対象となって、「商店街ノ面影ヲ一時ニ失ヒ寂漠タル地帯トナリ放置セラレ」たという。残った建物も五月二九日の大空襲の際に被害を受けているが、東側はこの建物疎開のために焼失を免れている。

商店街の西側は、図1では道路の左側、図2では下側に当たる地域である。

戦後は、西側に残った九軒が五〇〇〇円ずつ出費し、九尺（約二・七メートル）間口九〇軒の仮店舗を造ったところから始まった（『25年の歩み』大口通商店街協同組合）。これは官公署に依存せず自力で建設する、「『良イ品ヲ安ク親切ニ消費者ヘ』ヲモットトシ飽ク迄正直本位薄利多売主義ノ商業道ニ立脚シテ経営」するなどを申し合わせて着工した。短期間で完成させ、「新旧合シテ一四七店、畳商ヲ

図1　大口地区の順路





出典：半井清資料A-26-4「神奈川区　大口通商店街」（横浜市）より作成。
注：各商店名は省略した。■は「無商」と書かれている店舗。★は上田商店の位置。

写真1　大口通商店街を通過する車列
大口通商店街協同組合資料

表1　1946（昭和21）年2月　大口通商店街の業種別店舗数

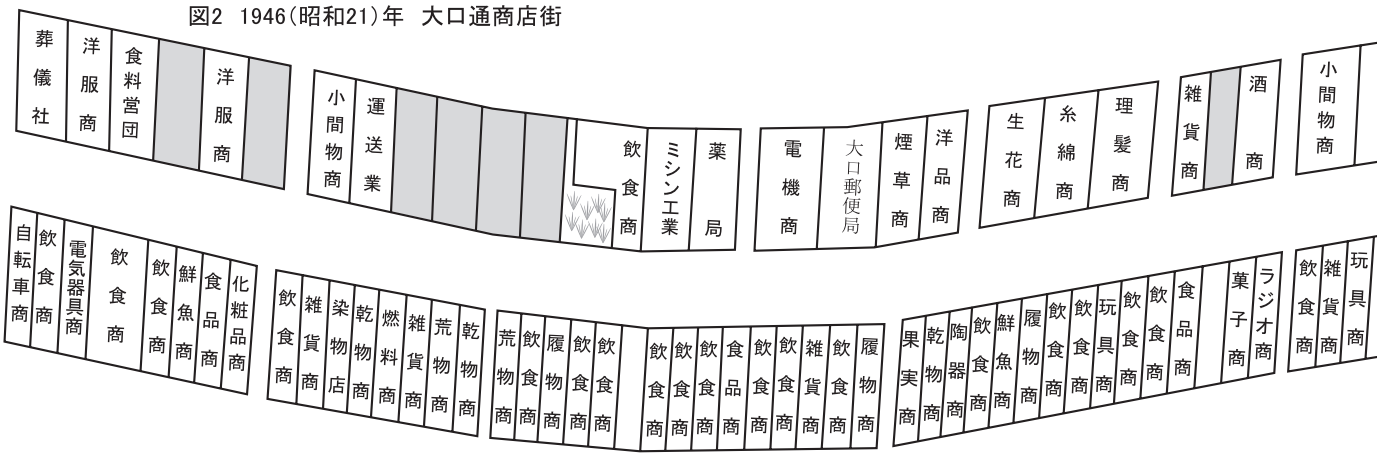
店舗種類	店数	店舗種類	店数	店舗種類	店数	店舗種類	店数
飲食店	31	酒屋	3	瀬戸物商	3	生花商	1
食堂	1	煙草屋	2	化粧品店	2	理髪店	1
ミルクホール	1	菓子商	1	薬品店	2	進駐軍土産店	1
乾物商	7	履物商	6	電気器具商	4	古物商	1
果実商	7	洋服屋	3	ミシン工業	4	時計屋	1
魚屋	6	洋品店	2	玩具商	3	準備中	12
食料品店	6	染物店	1	金物屋	3	事務所	1
銘茶商	2	呉服商	1	薪炭商	2	郵便局	1
惣菜店	1	糸綿商	1	本屋	2	銭湯	1
油商	1	帽子商	1	自転車屋	1	医院	1
食糧営団	1	雑貨商	8	葬具屋	1		
青物共販所	1	荒物商	4	運送店	1		

出典：図2と同じ。

除ク外市民生活必需品ヲ網羅」したものとなった。写真1右側が、この時に造られた店舗で、等間隔の間口や看板の様子がよく分かる。いちばん手前の上田商店は、図2右ページの★を付した「油商」である。当時、商店街では、一日平均二〇万円の売上げがあり、市内だけでなく、川崎や鎌倉からも客が来たという。

表1は、四六年の業種別店舗数を示したものである。図2と合わない部分もあるが、まず、飲食店が三一軒といちばん多く、準備中を除く一三五軒の二割以上を占めている。このうち、一軒を除く三〇軒が西側の店舗に新しく入った店であった。次いで乾物商・果実商・魚屋・食料品店などの食料品関係の店が多い。また、ラジオ商などの電気器具商が四軒あり、進駐軍土産店（スーベニアショップ）も一軒あった。

図2　1946（昭和21）年　大口通商店街



大口仲町復興住区

大口仲町復興住区は、商店街の西側にあたる地域で、五月二九日の横浜大空襲の被害を受けた後、いち早く復興した地域であった。

「行幸一件」資料によると（「神奈川区　大口仲町復興住区」横浜市、半井清資料A―26―3）、空襲被害前は、大口仲町第二町内会三一七、第三町内会三五六世帯で、多くは会社員・工員・自由労働者であった。戦災により「全滅ニ瀕シ着ルニ衣ナク住ムニ家無キ」状況となり、両町内会で約四三〇世帯が残り、壕舎や「焼トタンノ仮小舎」で雨露を凌ぐ程度であった。そこで市の勧奨により「戦時住区」建設を企図した。「戦時住区」は、疎開・戦災により住民が皆無になることを防ぐために、しかし防火用地も確保するために、敷地一〇〇坪に五～七坪の住宅を確保するもので、建物疎開の古材が供給された。この案に対しては、小田原や横須賀から建物疎開の古材を運搬しなければならない事に反対があり、残った一〇三世帯が建設することになった。その後、鶴見区などの疎開古材が使えるようになり建設が進み、八月三〇日に総て完成した。内訳は、第二町内会が五三戸（図1、但し五二戸）、第三町内会が五〇戸で、職業別には工員四七、自由労働者二六、会社員八、商業七、官公吏六、その他九の計一〇三戸であった。なお、戦後には「復興住区」と呼ばれている。

「行幸」を伝える新聞記事では、「赤錆びた焼トタンを壁代用にしたマッチ箱の様なバラックが並んでゐた」と記され、昭和天皇は知事の説明を聞き、「しばしその場に御立ちになられた」と記されている（『朝日新聞』一九四六年二月二〇日）。

おわりに

この大口地区の風景は、直ぐに無くなってしまう。この地域は、一九四六年八月戦災復興区画整理地区となり、換地は五九（昭和三四）年となったが、道路や公園が整備された。また、四七年に大口駅の設置が決まると、商店街独自で従来の約五メートル道路を一一メートルに拡張し、これに伴い仮店舗は撤去された。また、店舗の拡張のために収容しきれない三〇～四〇店舗については、補償金により解決を図った。

【参考文献】
『横浜市史Ⅱ』第二巻上・下、『東海道神奈川宿　神奈川宿遊学セミナー連続講座　神奈川の近代―宿から町、そして区へ―』、『25年の歩み』大口通商店街協同組合、一九七四年）、『横浜の20のまち』（横浜市、一九八六年）。

（百瀬敏夫）